



大魔族ヴィムドールの
異種婚計画

スライムで弱らせ聖紋封じ！
スライム姦からの勇者をレイプ

登場人物

■メインキャラクター

勇者（セラ）

かつて魔王を倒した由緒正しき勇者の末裔。普段は男の子の格好をしている。明るく、前向きで、実はえっち。

ヴィムからは「セラ」と呼ばれている。

聖剣《フローベール》を持ち、処女を守る《聖女の加護》を受けているが、日々、ヴィムやヴィムのけしかける魔物に性をもてあそばれている……。日

ヴィムドール

通称「ヴィム」。

天才的な魔術の才を持ち、魔界で名をとどろかせた大魔族だが、興味を持ったこと（主に、セラにえっちなことをすること）にしか発揮できないし、していない。見目麗しい姿をしており、人間離れしているため、セラには「きこりの泉の精霊」を名乗っている。

■サブキャラクター

プリムローズ

ヴィムの姉。

豊満な肉体を持つ魔族。女の子にしか興味がない。いつも女の子を侍らせている。

スライムで弱らせ聖紋封じ！

スライム姦からの勇者レイプ。

勇者。

かつて人と魔族が争った時代……。聖剣を手に魔王を倒し、長くの戦いに終止符をうった者を、人間たちは勇者と呼んだ。

それはもう、今から三百年は昔のことである。

勇者様は、国王からの豪華な褒章も固辞し、それきり、表舞台からは姿を消した。うわさによると、田畑を耕し、穏やかに余生を送ったのだといわれている。

そしてその末裔は……ダンジョンでスライムを浴びていた。

「っっ！」

じたばたと暴れ、なんとかスライムから逃れようとする少女。

ブーツのかかどが、地面に落ちていゝる聖劍の柄にひっかかった。ひっかかった枝で服が破れ、自分の太ももがあらわになるのと引き換えに、少女は劍をなんとかたぐりよせる。

「力を貸して……っ、フローベールっ！」

キイイイン……。

勇者の力に反応して、聖劍《フローベール》の刀身は鞘の中で白く光らせる。フローベールは、勇者の家に伝わる魔を払う聖劍なのだ。

「……ごめんね！ たぶん、死なないからっ！」

スライムは震えるようにぶるぶる震える。

「えいやっ」

少女は、劍の刃を鞘におさめたまま、劍を振り下ろした。

ぽかっという音がしたにはしたが、……それだけだ。

スライムにはまったく効果がないようだ。

「あれ!？」

驚いた少女は一瞬の隙を突かれ、スライムに下半身を飲み込まれてしまった。

「うああっつ、どうして……は、はなれて、はなれてよお……」

まわりつくスライムを蹴り飛ばそうと、じたばたと足を動かしていた。

もしも最初に剣を使わず蹴りをくれていれば、難を逃れたかもしれない。

スライムに膝まで覆われてしまっている今となっては、手遅れだ。プールの、それもとても粘性のあるようなプールに飲み込まれている状態を想像すればわかりやすい。

「ううっ……」

数代は経ているとはいえ、少女はたしかに勇者の末裔ではある。

小柄で健康的な体軀は年相応ものだが、見た目以上の力を秘めている。スライムなんてその気になれば「ぷちゅ」っと殺せる……だろうが、勇者には魔物に対する殺意がなかった。

剣を柄から抜かなかつたところからもそれが見てとれる。

人が魔族と争っていた時代もはるか遠く、「見かけたら殺せ」という時代でもなくなっていた……。

きらりと、茂みの中で何かが光った。

木の陰に一つ目のモンスターがいる。スライムと格闘している少女にはそれを見つめる余裕はなかったが、よく目を凝らしてみれば魔物だとわかる。一見すると翼はコウモリにも見えた。瞳以外はじっと動かない。少女が動くたび、動くたびに、右へ左へと瞳が追従していた。

少女がスライムに凌辱される様子を、じっと主に送り続けている。

「ふ、ふふふふ……」

その相手とは、大魔族ヴィムドールだった。

7 甚大な魔力を持つヴィムドールは、下級の魔物に精神を同調させ、酒を飲み、ま

た、自慰にふけりながらも、魔界の自室のふかふかした椅子で、性的に甚振られる少女をゆったりと眺めていた。

「ああ、セラ、そんな、雑魚スライムにまでひどい目に遭わされるなんて……勇者も、たかだか知れてるなあ」

ヴィムが「セラ」と呼んでいる少女は、正真正銘、由緒正しい勇者の血を引いている。

しかし、今は、戦の世ではない。人と魔族の争いは、ごく限られている。戦いなくていいはずだ。せいぜいが薬草を探して持つてくるくらいなの、小娘にすぎない。「『なんで、剣が効かないの』って？ ふふ、そうか、セラは知らないのか、セラ

……ふふふつ、ふははははは」

ヴィムは一方的に『目玉』を通じてセラを見ているだけだから、ヴィムの声はセラには聞こえていなかった。だからヴィムはひとりでしゃべっているのだった。

「教えてやろうかー、セラ。勇者のあかしである聖剣《フローベール》、悪しきも

のを打ち砕くための剣だろう？　それはな、あははは、スライムには効かないんだなあ、これが！」

聖剣にとって「悪」かどうかは、聖剣のみが知る倫理によって、システマチックに判定される。

剣が知る倫理とは、『相手を害する意志がある魔物かどうか』その一点のみ。

この弱点を、ヴイムは知っていた。

「あははは！　はーっはっは！　つまり、スライムに意思はない！　単純で、動いて、刺激に反応するだけの生き物だからな！　ああ、可愛そうなセラ。相手がオークやゴブリンや、それか、俺だったら……、意味があるんだけどな……」

スライムの動きは、反射に過ぎず、複雑な意識を持つてはいない。

つまりは……あの憎き聖剣は、下級の魔物にえっちなイタズラをされることについて、全く無防備なのだった。

ヴイムはセラの心を知らない。セラは、「なるべく罪のない魔物を殺したくはな

「い」と思っている。つまり、斬れなかったら、罪のない魔物。セラの中では斬ってはいけないものになるのだ。

「ううっ、うう………や………やだあ………。やめてよ。許さないから！ 本当に怒ったからね！ ホンキで！ ホンキで怒ったから！」

やああ、と威勢のあった声が小さくなっていくのだった。

「もう、だめ、やっ………♡」

「セラ……。人倫の基準を、無機物に頼ったらいけないぞ。どうするんだ？ 聖剣がなかったら。ゴブリンやオークが、泣いたら凌辱を止めてくれると思うのか？」

セラ！ セラ！ がんばれ、ほら！」

「うう、ひっく。もう、もうやめてよお………」

「いいぞお。もっと乞え、その声で」

「……やめて………ください………」

「……っ」

こちらの声は通じていないはずなのだが、奇跡的に会話が成立した。

ヴィムは興奮した。

ヴィムの手の中では、人ならざるものの、大きな性器が脈打っている。

「せ、セラ……俺も大好きだ……」

「やめてよ……」

嘸み合わない会話を一方的にかわしながら、ヴィムは声を荒らげている。

ああ、セラ。

どうして、こうも可愛らしいのか？

追い詰められたときには人の本性が出るとは言うが、セラはひたすらに可愛い、と、ヴィムはいつも思っている。普段、勇者らしく、と振舞っているりりしきはどこかに行ってしまったって、漏れる声はすっかり女の子の声になっている。

「きゃんっ！」

11 「セラ、セラ。勇者の生まれだからって、普段は男のふりしてるくせに！ ごまか

せてないじゃないか！　ちつともできてないぞ！　身体は女の子じゃないか！

ちゃんとしなさい！　ほら！」

誰も見ていないときの声は取り繕ってなくて、「うぐ」とか「ぎゅう……」というような、哀願を帯びていた。

「あ、ああああ、あ、あ、あーーーっ」

いつも元気で明るいセラが、嗚咽交じりに赦しを乞うのがとてもよい。本当に気持ちよかった。最高だ。

と、そこへ……闖入者の声がした。

「おい、こっちに誰かいるぞ!？」

「なんだ、若い女の声じゃないか？」

「……」

ぴく、とヴィムのみけんがひきつった。

「ゲイザー」

目玉の魔物を、そう呼ぶ。ゲイザーは命じられずともその場を離れ、セラの代わりに汚らしい男を映した。

このあたりを根城にしている山賊のようだ。

「ならず者どもが……っ！　くそがっ！　俺とセラのあいだの邪魔をするな。不愉快だっ！」

ヴィムが呪文を唱えると、空中にどす黒い空間が現れた。狙いをつけてざん、と首を搔つ切るしぐさをすると、風の刃が山賊を切り裂いた。

「ぐえっ」

「ぎゃあっ」

一人が倒れると、もう一人は一目散に逃げ去っていった。ぼろぼろと何か、ひとつではない財布を落としている。金貨が道しるべのようにぼとぼと落ちているが、人間の力にはヴィムは興味がない。

スライムは別によいが、人間の男がセラを汚すのは、許しがたいことである。

「ああ、余計な邪魔が入った。ちっ、セラ、セラ！ 俺のセラは！? ゲイザー！」
ヴイムの目と耳としてこき使われているゲイザーはのろのろとセラの方へと戻っていった。

「よし」

「ひい、ああ、いやあつ、やめ……そんな、そんなところまでっ！」

セラは相変わらず、ぐちゃぐちゃではあるが、乙女の凌辱風景は不思議な清涼感があった。

「ああ、よかった。まだ本番じゃないな」

「ふ、ふうっ……」

セラはあられのないすがたでぐったりしていた。

「俺を待っててくれたんだろ？ セラ……」

やはりヴイムは一方的につぶやいた。

「ん……」

スライムがもぞもぞと動く、どばつとセラに液体をかけた。さらさらした透明な液体は、見た目からはわからないほど恐ろしい威力で服を溶かすのだった。

「かはっ、あ……」

そして、あつたかい。

セラはすっかり息が上がっていた。頬を染めて、目を潤ませる。なんとか這いだして逃げようと努力していて、ほふく前進をしようとするが、距離はまったく進んでいない。

「やっ、やーっ」

透明で無機質なスライムは、愛らしいセラの太ももの上に這っていた。

「や……」

「はあ……最高だな」

ヴイムはふうつと息をついた。

「ん？ おっと、あれは何だ。おい、もっと寄れ、ゲイザー！ セラのだいじなところがよくは見えないじゃないか！」

ゲイザー……つまり目玉の魔物は一瞬だけ、遠くにいる主にジト目を向けた。しかし飛び立つと、すっとセラのむちっとした太ももに接近する。

「ああー、なんだ、単なる服の、溶け残りか……」

透明な液体に白っぽい欠片が混じっている……、繊維のかけらだった。

スライムは、革や金属（や皮膚）は溶かさないのだが、紐や布はよく溶かす。

より鮮明に、大きく映し出される視覚の、繊細なインパクトに、ヴェムは満足した。

前はもつと映像が荒かった。しかも、手元が上手く見れなかったのだ。

それに、タイムラグがあった。だから一体感がなく、セラがいくときに自分も精を吐き出すというのが難しかった。

また、術の精度が向上している。

「うん、いい角度じゃないか。きめ細かいセラの肌もきちんと見える。ああ、セラ。なんて白い肌なんだ。柔らかい……。しかし、匂いや魔力が感じられないのはいただけないな。いや、幻惑術を駆使したら改善できるか？ ……しかしなあ、やっぱりホンモノには及ばないよなあ、セラ」

「あつ、あああ……」

セラが、剣を扱うためのグローブは、がっちり留められていて、そのせいでそれは脱ぐことができないでいる。真っ白でやわらかな裸身と対比的で、その光景は、なかなか良かった。

「セラ、セラ、なんてすがたなんだ……はしたない……」

ブーツとベルト……グローブ。そこだけ装備ががっちりしている。

「あ、あ、あ、うう……これ、お気に入りであったのに」

今、それどころじゃない泣き言は、意味をなしていなくてかわいかった。

「白い下着はいいよなあ。花の刺繍まで見える……可哀想になあ、セラ」

「ふええ、ショーツ、お気に入りだったのにい」

「んっ……」

あのタイプの人間の下着はショーツと呼ぶのか……と、ヴィムが「なるほどなあ」と、脱線した感想を抱いたところで、そろそろ、スライムによる凌辱も佳境となっていた。

「もう、やああ！ やだああ！」

ぼたぼたとまとわりつくスライムが、セラの、形を保てなくなった下着にはり付いてうねうねと怪しく動いていた。ひもで保たれていた部分はぶちっと切れて、下着だったぼろきれはばさつと落下する。

外気にさらされたセラの秘所が、暴かれるのを待っている。

「お、いいぞー」

ヴィムは野次を飛ばした。

スライムは、大人しくしているように見えるが、もぞもぞとうごいて次の段階の

準備をしていた。

スライムは、狭くって湿ったところにもぐりこみたがる性質がある。普段は岩場の影や、地面の穴などに入り込むのだ。

「……ひっ」

「今日は上手くいくといいんだがなあ……」

ヴイムは何度か、セラを上手いこと騙してスライムに凌辱させている。しかし、スライムの側に性欲はない。少年誌くらいのすげべさで終わることもよくあるのだ。肝心の侵入まではいかないことも多くて、「これでおしまい」という事もあった。ものすごくがっかりしたまま、セラを回収しに行くと（セラは、ヴイムのことを魔族だと理解していない）、助けがきたと、元凶を、熱で浮かされた目で見るのだ。

「あ、ヴイム、さん……？　ヴイムさんだあ……」

抱きたかった。

19　ぐちゃぐちゃに犯して、自分の子を孕ませたかった……。

しかし、相手は勇者の末裔だ。なかなか「そう」はいかない。

「……まあいいさ、料理だって手間暇がかかればかかるほど旨いんだからな」

ちなみに、魔族には料理というものに疎い。火を通すかすりつぶすか、そのくらいのものだ。料理も人間の作り出した技術だ。

服を溶かされて、どろどろになっている少女。

しどけなくもだえ苦しみ、ぼろぼろと涙をこぼしながら、誰に見られていると理解しているはずもないのに、乳首を見えないように胸を庇って、肩で息をしていた。下からだとおっぱいは丸見えだが。

「はあ、はあ……」

……たしかに、これだけでも良い光景ではある。

ヴィムにも、下着に浮いたピンク色の乳首だけをつつましいオカズにしてきた日々もあった。魔術が未熟なころはそうするしかなかった。上手いこと視覚の共有もできず、スライムの性質も、なにも、知らなかった……。

苦しい日々だった。

カメラとも呼べるゲイザーが上手く制御できず、ブラックアウトしてしまい、ぐちゅぐちゅという音と喘ぎ声だけを聞いて、余計な想像力を養う羽目になったこともあった。

「やだあ、こんなになっちゃった！」と可愛い声をあげるセラの、「こんなに」が何を現しているのか、知りたくて知りたくてしかたがなかった。

「ゲイザー、右だ。右右右右」

遠隔、操作、催眠。これだけでもかなり、高度な魔術の技である。

ゲイザーは通常視覚しか持たず、聴覚はない。ヴィムが音を感じる器官をとりにつけたのだ。それは魔界を震撼させ、新しい技術としてもはやされたが……、まあ、ヴィムほど上手く使いこなしている魔族はいない。

これは、すべてがセラを熱心に凌辱するための努力の集大成だった。

魔族というのは単純で、一つのことにはしか興味がわかない。だから、実際に使い

こなせる術はおおむね一つということが多かった。

ヴィムは違う。

おそらくは魔王の血を引いているヴィムは、生まれつき無尽蔵の魔術の才覚を持っていたようだった。しかし、その能力に目覚めたのはつい最近のことである。

何をやっても上手くいかなかった、中途半端な出来損ないは、セラの凌辱という目的を得て、大魔族と呼ばれるまでになった。

（そうだ。今の俺は昔の俺とは違う。好き放題、為すがままに、勇者を犯せる……つ。あれさえなければ、あれさえ……）

「あ、ぬ、ぬけた……」

「あつ、こら！ 逃げるな、セラ！」

セラは運が良い。きっと、日ごろの行いが良いのだろう。ブーツが脱げる代わりにスライムの拘束を逃れた。表情に安堵と、希望が浮かんだ。

しかし男運だけはない。

「逃がさないぞお、セラ！」

セラは今この場限り努力したが、ヴィムは努力し続けていた。

スライムの特性を深く理解し、遠隔でも魔物を正確に操れるようになり……それから、こういった魔術も身に着けた。

パチンと指を鳴らすと、暗闇が浮かび上がり、空中から生えたぬらりとした触手がセラの足を引っかける。

「ひゃああ、何!? なんでえ……!? やや、やだやだやだ」

「なんでじゃない。わがまま言うなっ！」

「やだあ……」

「やだって? じゃあお前は俺が触手を送り出す努力をしてるとき、振り払う努力をしたのか、ちよつとでも? してないだろっ! このっ、この、ならお前が悪い、セラ！」

触手を操って足を引っかけると、脚を、両側にかばっと開いた。

「ふえ……」

じゅわつと水っぽい音がして、可愛らしいピンク色の部分が露わになった。

体液か、スライムか、分からないものがポタッと落ちる。

スライムは静止して、何かを考えるようにじっとしているが、別に本当に何かを考えているわけではない。

鮮明な痴態にヴイムは自己満足を覚えた。

「やだ、やだ、やだ。どうして、おかしい、おかしいよ。なんで？　こんな、ツタにひっかかるの？　こんな、こんなときにばっかりっ」

「……そうだぞ、セラ。おかしいだろ。気が付いた方がいいぞ！」

セラは、この理不尽な触手の介入に全く気が付いていない。この異常な介入を、ピンチになったセラはいつも「運が悪かった」と、己の不運のせいに行っているようだ。まあ、パニック状態で、見えない位置からだからしかたがないと思われる。ツタだと思っっているそれがピンクのねっちょりした触手だとわかったら……。わかつ

たら……。

(ふむ……分かったときの顔も見たいな)

まあ、それは今度にしておこう。

まだ、抵抗する。陰部を手で隠そうとしたのを思いっきり絡めとって、ぐいっと足を開いた。はらっと、かかっていただけの服の一部が落下して、また見通しがよくなった。普段、男の子の格好をしているセラは、身体のラインを隠しているが、こうなればもう「女」でしかない。

「ひい……」

どうぞ、と、突き出された柔らかいところに向かって、スライムが遠慮なくはりついた。

「よしっ、いいぞ」

「うそ、うそうそうそうそ」

25 「うそじゃない。現実を見ろっ！」

「やだ、こんなうそ、ぜったいうそ」

「うそをつくな、勇者のくせにっ!」

「あ、っ、ああああ~~~~~」

「スライムに犯されてるんだぞ! これから犯されるんだぞ! 3歳のガキでもスライムには負けないぞ。セラ、勇者じゃないのか。情けないと思わないのか!」
ずるっ。

スライムの一部が、そして遅れてほとんどが、セラの中にもぐりこんでいった。

「あっ、~~~~~っ!? ああああっ、ああ~~~~~」

「セラ、セラあっ!」

ヴイムも、それに合わせて激しく性器をさすった。

こうなればもう、スライムはなかなか出てこない。

崩れ落ちかけるセラ……。

ヴイムは、ちよっとした愛情を發揮して、触手でセラの身体を支えてやることに

した。まあ、その方が視姦しやすいからでもある……。

「はっ、はっ」

「んあああん、やあ、やだっ。私、スライムに……犯されて、あっ♡♡♡♡♡」

「セラ、謝りなさい。謝れ。勇者の家系をきちんと継いできた、お父さんとお母さんに詫びなさい」

「ええん♡」

セラは身体をのけぞらせながら侵入に耐えていた。身もだえてているのが、分かる。いや、耐えるというのは正確ではない。耐えられていないからだ。でも、そうすることしかできない。

「セラーっ！」

「ああああ！」

セラの下半身を覆っていたスライム。先が、セラの中に入っている。結構な量だろう。

「ふう……いや、」

「ん、んあ、んあ、やー、やー、やだっ！」

「ああー。可愛そうに、可愛そうだ、ほんとうに。ごめんな？ いやなら離してやろうか、セラ」

「ひっ、ひっ、あ」

グイムはパツと、異形から這いだす触手をひっこめ、セラの手を離してやった。

「あ、と、とれたあ。ううう、お願い、出て、出てよお」

セラは必死に細い指をくぐらせ、自分の股を探り始める。

スライムの一部が、粘液と混ざり合って地面にぼとっと落ちた。しかし残りは未だ、セラの中に居座り続けていた。

セラの中は、もう、ぐじゅぐじゅになっている。かすかに頭をによきつとさせたが、すぐに引っ込む。

「くっ、うう……ううっ、出て、出てよお、どうして」

「なあ。セラ。つるつとした、ただでさえつかみにくいスライムをだな？ 先っちよだけつまんでな？ 上手いこと、出せると思うか？ 無理だろう、普通に考えて。頭バカになったのか？」

「やあ……やだ、はやく、はやく出てよお」

安全で湿って、柔らかく狭く、あたたかい乙女の秘所は、スライムのひそむ場所としては最適である。悪意もなく、くにくにとうごめいているはずだ。

「う、ひい、ういい……やなお……」

セラはスライムが、とろうとすればとろうとするほど深く入り込むのを知らない。こうなった場合の正解は脱力して、出ていくのを待つことである。

スライムで悪い遊びをする者や、村のませた女性ならだれでも知っていることだが、男として育てられた育ちのせいなのか、セラは、そういった知識に乏しかった。つまみだそうとして、案の定ムリで、ぐっと自分で指を入れてしまえば、スライムはますます奥に入り込んでしまう。

「ん、んあああーっ」

焦ったセラは、お腹の上からぐっとスライムを押す。

「あっ、セラ、それは……っ」

「あっ♡♡♡」

「セラあ、それはいけないだろ？ いじめたことないのか？ スライム。によきつとするじゃないか？ ないのかなあ、セラはとっても良い子だもんなあ」

スライムは刺激を受けると、一点を硬くし、防御反応として、えいやと突起を出す。たとえば棒でつんつんすると、一部が角が生えたように突き出す。やわらかいので、大した威力はないが、この場においては、一番柔らかいところを、ぽかぽかと内側から刺激することになる。逃げ込む先はセラの中。パニックになったセラは暴れてなんとか掻きだそうとする。

「や、やあ♡♡ う、うあああ、ん。ふえええ」

「あーあ、前もこうなったのに。バカだなあ。いつ学習するんだ？ まあ、これを

やるたびに、俺が記憶を消してるから仕方ないのかな。でも、身体で覚えるもんじゃないか？ 運動は得意なんじゃないか？ 知ってるぞ。勉強は大してとくいじゃないもんなあ。運動もだめなのか？」

「ひあ、や、やあ♡♡ う、うあああ、うあー」

「イけっ」

ばしゅうつと破水でもするかのようにスライムが何かを吐き出す。追加の粘液だ。あれはあったかいよな、とヴィムは想像する。

セラはびくびくと身を震わせると、ぐったりと身体力を抜いた。

少しだけ中から這いだしたスライムだったが、スライムはもぞもぞと中を出入りしている。

「あちゃあ。居心地がいいかー、仕方ないよな」

「おっ、あっ♡♡ あっ！」

「セラの中はあったかいもんなあ……」

セラはびくびくと痙攣していた。そうすると中が締まるのだろう。するとスライムはぎゅむっという圧を受けて、固くなり、またべちっとな押し返す……そして……。
エンドレス。

「やあ、ごめん、あやまるから、やめて、いじめないで♡♡」

そろそろ並の人間なら気絶しても良いのだが、勇者の体力が、悪い方向に作用していた。きゅうっと締め付けるたびにスライムは身もだえする。

「ど、どうして……うう、やだ、やだよお。あっ……♡♡ やめ、やめてえ……」

弱弱い拳が振り上げられて、体内のものではない、周りのスライムをぺちぺち打ち付けていた。意味はないのだった。穴といっても、鼻とか顔にかかるさずがにかわいそうなので、触手でさりげなくおいはらってやった。

「よしよし」

「ううっ、ぐすっ」

「可愛そうな、俺のセラ」

まあ、その分の親切のお返しはもらうことにしている。

目玉は、セラがぐったりとして発覚する心配がなくなったので、大胆に飛び立ち、足もとにくると、じっとセラの秘所を覗き込んでいる。

すっかり晴れているというのに、そこだけ地面が湿っている。ちょこんと茂った若葉を見つけて、微笑ましい気持ちになった。

「あつ、また、スライム、ああつ……」

どこからか降ってきたスライム。

「おつ、これだ、このために俺は……！」

スライムは芸術的なまでに美しく、透明だった。

コケを取り込むスライムは普通緑色である。ヴィムが用意したスライムだった。

これには苦労したものだ。このためにきれいな清水で育て、何度も厳選を繰り返して、ようやくこの変態スライムを生み出すことに成功した。

薄っすらとした恥毛とともに、中がはつきりと見えた。

「あ……」

何も入っていないかのようには、セラの膣の入口はぼっかりと口を開けている。スライムの液に混じって、絡みついたぐじゅぐじゅの粘液で汚れている。

よく見ると光の加減で、スライムの輪郭が見える。ひくひくと痙攣していて、それがきゅうつとしまった。そして、……ぶしつけな膜がはっている。

「くそ、くそくそくそっ」

セラの下腹部には淫紋、ならぬ聖紋が施されている。スライムはセラを深くえぐっているが、最も奥には到達しない。乙女の処女を守るための加護は、これも勇者の家系に受け継がれてきたもののである。

これが、なかなか破れないので困るのである……。

けれども、結界は弱まっている。

「あ、やあ、ムリ、あっ♡♡　くうっ……やっ♡♡　あああっ！　やだ、この子、つめたい、あ、っ、やだ……くう……あ♡」

「あはは！」

あとは、意識がなくなるまでスライムに犯されることだろう。というか、意識があつてバタついていているあいだはスライムは抵抗し続けるため、そうなる。

セラは粘り強く、長く責めを食らうことになる。

一度スッキリしたことで、ヴィムにも思考の余裕が生まれる。細部を楽しむ余裕が出てくる。ときどきは触手でちよつかいをかけ、わざわざ責め苦を長引かせる。

「ああ、セラ。とつとと諦めたらいいのに……」

可愛そうだ。かわいいそう。

そんなセラを、歪んだ気持ちで……ヴィムは愛している。

「ふう……」

とりあえず、出すものを出して、いったん、この場ではヴィムは満足した。ゲイザーは自由に舞い上がり、主に映像を見せるのをやめる。セラはカメラからフレームアウトする。力なく横たわったセラはびくびくと痙攣していたが、聴覚は少しの

あいだ残っていた。

「だれか、だれか……たすけて……ひつく……お父さん、お母さん。……ヴィムさん」

「あああつ、セラ、すぐにいくからな……？」

準備のために、自身もまた黒いゲートに乗って、セラの下へと向かうことにする。「でも、俺の名前を3番目に呼んだから、ゆっくりだぞっ」



「……」

言葉を発さず、半裸で、虚空を見つめるセラ。

それから、輝きをずいぶんと失った聖剣が、隣に落っこちていた。

「くっそ、じゃまだ……」